

— フォーラム —

For Japanese Journal of Ornithology  
Impressions of the International Ornithological  
Congress, Tokyo 18-25 Aug 2014

Judit Szabo

Tokyo 2014 was my third IOC after Hamburg in 2006 and Campos de Jordao in 2010. This time there were about 1200 participants from 64 countries presenting more than 900 papers for symposia, orals and posters. There was a great representation of students from Asian countries. As before, the quality of the conference did not disappoint. We can't complain, the venue was beautiful, the organisation was smooth, sessions run in a timely manner and even the weather was gorgeous!

We started the meeting on Monday with a whole day workshop on bird banding and marking. After presentations from different parts of the world, we had a discussion of some current issues and discussed a manual for countries that wish to start a banding scheme.

The conference itself started on Tuesday, and was action-packed: two plenaries a day, eight concurrent oral sessions and symposia, poster presentations in the afternoons and after dinner roundtable discussions with surprisingly large turnout of people and enthusiasm.

From my point of view, it was great to get all researchers together in order to better coordinate migratory waterbird research. We also discussed actions to be taken by researchers to enhance better uptake of research by site managers and conservation organisations as well as tools that can help researchers to influence policy.

Personally, I was encouraged by the emphasis on finding solutions to the ongoing crisis facing migratory waterbirds in the East Asian – Australasian Flyway. Researchers, scientists and conservationists from many Flyway countries attended, debated and discussed issues, both in the formal sessions and informally. If we are to save the birds we all love, occasions like the IOC are vital in bringing key people together in a scientific forum.

Unfortunately I did not have the chance to participate in a field trip, but was lucky enough to visit

Miyake Island for a few days before the conference.  
(East-Asian Australasian Flyway Partnership  
Science Officer)

日本鳥学会のみなさまへ  
国際鳥類学会議 in 東京  
(2014年8月18~25日) 体験記

ユディット サボ

東京での国際鳥類学会議は、私にとって2006年のハンブルグ、2010年のカンポス・ド・ジョルダンに続いて3回目の参加となりました。今回、64ヶ国からおよそ1,200名の参加者、900を超えるシンポジウム、口頭、ポスター発表がありました。そしてアジアの国々からも学生によるたくさんの発表がありました。これまで同様、失望することのない質の高い会議でした。すばらしい開催場所、スムーズな組織運営、タイムスケジュール通りのセッション、そしてすてきな天気と、文句のつけようがありませんでした。

会議は月曜日まる一日かけて開催された鳥の標識に関するワークショップから始まりました。世界のさまざまな地域からの報告のあと、現時点での課題について話し合い、標識の計画策定を望む国々への手引きについて議論しました。

火曜日から本格的な会議が始まりました。1日に2つのプレナリートーク、8つの口頭、シンポジウムのセッション、午後にポスターセッション、夕食後にはラウンド・テーブル・ディスカッションと盛り沢山の内容でした。これらの会議に驚くほど多くの人々が熱意をもって参加していました。

私の見地からすれば、渡り性水鳥類の研究をより組織的に行うため、すべての研究者が団結したことがすばらしかったです。そのほかにも、生息地管理者や保全を行う組織に研究への理解をより深めてもらうために研究者がとるべき行動について、また政策に影響力を行使するため、研究者にとって役立つ手段について議論しました。

個人的には、東アジア・オーストラリア地域フライウェイにおいて、渡り性水鳥類が現在直面している危機への解決策を見いださねばならないと強調されていたことで私も勇気づけられました。フライウェイに含まれる多くの国々から、研究や

保全に携わる人々が、公式、非公式な会合に集まり、この問題を熟慮し、議論をしました。私たちすべてが愛する鳥を守ろうとすると、IOCのような機会は、研究や保全にとって鍵となる人材を科学的な集まりの中で引き合わせ、団結させることのできる不可欠な場だと思います。

残念ながら、私はツアーに参加できませんでしたが、会議前に数日間三宅島を訪れる機会があり、とても幸運でした。

(東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・  
パートナーシップ サイエンスオフィサー)  
(訳：嶋田哲郎)

## IOCのラウンドテーブルディスカッションを終えて

森口紗千子

現在私たちは、日中韓を中心としたガンカモ類研究者で公開されているモニタリングデータ等を活用した共同研究を進めています。2014年のIOC東京大会において、この東アジアにおける水鳥類モニタリングデータの共有プロジェクト (Cooperative project for sharing monitoring data of wildfowls in East Asia) についてのラウンドテーブルディスカッションを開催したので報告します。

今回のラウンドテーブルディスカッションの目的は、まず本プロジェクトを紹介し、各地域の研究者による保全上重要な種や生息地の提案などの情報交換を行ない、そして今後の協働体制の方針についての議論することです。プロジェクトのメンバーは日中韓の越冬・中継地の研究者が中心になっていますが、東アジアに生息するガンカモ類の主な繁殖地であるロシアの最近の生息情報を知る機会があまりなかったため、ロシアの研究者にも発表をお願いし、話題提供者は中国から1名、韓国から1名、ロシアから1名、日本から2名の総勢5名となりました。当初はシンポジウムとして準備しましたが、地域を限定したために却下されてしまったので、ラウンドテーブルディスカッションに変更して再度申し込みました。

シンポジウムを申し込んだ時期はまだIOCの開催からは間がありましたが、いざIOCが近づいてくると、発表者のスケジュールが埋まってしまうこともあり、当初予定した発表者のうち、ロシアと韓国からの2名が欠席することになってしまいました。ロシアの方はIOCに参加を予定していた別の研究者を紹介してくださったので、ガンカモ

類の専門家ではなくなりましたがロシア人の代役をたててもらうことができました。韓国の方には発表ファイルを提供してもらい、私が代読することになりました。

大会が始まって6日目の本番までは時間があったので、2日目にとりあえず顔合わせて集合し、全員で流れを把握しました。代役をお願いしたロシアの研究者はまだ発表ファイルが届いていないというハプニングに見舞われていましたが、本番には間に合うだろうということでした。

ラウンドテーブルディスカッション当日、偶然会った発表者から、会場が変更になったとインフォメーションに貼り出されていたと聞きあわせて確認すると、もっと大きい部屋にしてほしいと、どなたかの依頼があったとのことでした。新旧会場付近にはたくさん会場変更の貼り紙をしていたっていました。

ラウンドテーブルディスカッションでは、趣旨説明の後、バードリサーチの神山さんよりモニタリングデータ共有プロジェクトの内容を話していただきました。ガンカモ類のモニタリングは各国で毎年行われていますが、例えば韓国で減り日本で増えているコハクチョウのように、各種の増減傾向は国間で異なる種も見られます。そのデータをフライウェイ全体で共有することにより、東アジア個体群の動態の把握を進めたいという内容でした。次に飛び入りで東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップのSpike Millingtonさんより、東アジアフライウェイにおける協働の重要性を話してもらいました。その後は各国の研究事例紹介へと移り、初めに私より東アジアのマガンは遺伝構造の違いにより、保全管理個体群が日韓と中国で異なる可能性が高く、別々の個体群として保全管理する必要があることを提案しました。次に共同企画者である中国科学院のLei Caoさんより、彼女らが構想しているガンカモ類を含む18種の鳥類追跡ネットワークの紹介がありました。三番目はBirds KoreaのNial Mooreさんの発表の代読で、韓国のモニタリングデータに基づいた鳥類のレッドリスト作成と、その掲載種であるコクガンやコウライアイサなどのガンカモ類について紹介しました。最後はLomonosov Moscow State UniversityのAnastasia Popovkinaさんより極東地域の繁殖地におけるガンカモ類とその保全上の問題点について話されました。繁殖地から見た重要種には、サカツラガン、アカハジロ、トモエガモなど、中国や韓国に主な越冬地をもつガンカ

モ類が挙げられました。ロシアではモニタリング体制の不備、狩猟の影響評価不足や規制が課題とされているようで、東アジア全域の主要な越冬・中継地とモニタリングネットワークを構築することを提案されました。

総合討論では、保全上の重要種と重要個体群について、キンクロハジロなど、東南アジアでも越冬するカモ類の情報収集も必要であること、一番数の多いマガモがアジア全域で減少していることは見過ごせないこと、アジア各国の重要種の情報を載せたウェブサイトが必要であることなどが話題に上がりました。情報共有システムについては、リアルタイムで生息地情報がわかるウェブサイトもしくは各国の関連サイトをまとめたポータルサイト、重要種のフライウェイレベルでの長期的な研究計画を立ち上げについて議論されました。消灯時間ぎりぎりまで会場係に追い出されるまで議論は尽きず、これらの議論は2014年11月に北京で開催される第16回ガン類専門家グループ会議(GSSM)へと引き継がれることになりました。

今回、把握できた範囲では発表者含めて6カ国26名の方々に参加していただきました。東アジア地域からの参加者は25名で、そのうち24名は英語を公用語としていない地域の方々でした。そのため意思疎通が難しい場面もありましたが、アジアで開催されるIOCで東アジアのプロジェクトを各国代表者が紹介し、当事者や周辺国研究者で議論する、という意義深いイベントを無事終えることができました。これを皮切りに議論を続け、東アジア地域における共同研究等をさらに活発化していきたいです。今回は東アジア地域だけでしたが、ガンカモ類の保全管理をフライウェイ規模で推進している欧米の事例から東アジア地域での保全の方法を考える機会があれば、協働体制などのヒントがあるかもしれませんので、今後の課題にしたいと思います。ガンカモ類重要生息地ネットワーク支援・鳥類学研究者グループ(JOGA)のホームページ(<http://www.jawgp.org/onet/ioc2014rt-d06ja.htm>)には本ラウンドテーブルディスカッションの趣旨と各発表者の要旨を和文と英文で掲載していただきましたので、興味がありましたらぜひ覗いてみてください。

最後に、ラウンドテーブルディスカッションを盛り上げてくださった発表者、参加者、企画から運営までご協力いただいたJOGA関係者、そして会場などご配慮いただいた事務局の皆さまに改めて御礼申し上げます。

(独立行政法人国立環境研究所 現所属：独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究所)

#### 国際鳥類学会議—IOC2014に参加して

長谷川 克

2014年8月18日から24日まで立教大学で開催された国際鳥学会(International Ornithological Congress, 以下IOC)に参加してきました。池袋駅の出口から会場案内係の方がいらっしゃったり、道すがらヤマガラをモチーフにしたIOCの案内ポスターがいたるところに貼ってあったりして、会場に入る前から例年の日本鳥学会大会には無いスケールの大きさを感じました。これは大会のたびに道に迷う、方向音痴の自分にはとてもありがたいことです。掲示されたポスターに沿って進むことで、駅を出た後はあまり迷わずに会場入りすることができました。

初日から大会会場には海外の研究者の方がたくさんいらしていました。日本での開催とあり、地理的に離れている西洋の研究者はあまり来られないだろうと予想していたのですが、実際は海外から来られていた方のほとんどが西洋の方だったように思います。西洋の研究者は絶対数が多いので当然といえば当然ですが、日本の大学キャンパスに西洋の研究者がたくさんいるという光景になにか不思議な、非日常的な感じがしてしまいます。ただ、この海外組の多さは僕には少し誤算でした。国際学会といえども日本で開催される学会なので英語ベタな自分でもなんとかかなと思っていたのですが、なんともなりません。会場周辺で繰り広げられる日常会話ですら何を言っているのかよくわかりません。道に迷ったらしい人に何度か話しかけられたときも全然お役に立てず、お願いだからもっと英語のできそうな人に話しかけてくれと思うばかりでした。会期期間中、少しずつ英語に慣れていくのですが、それでも結局最後までよくわからず、今年から英語を勉強しようとして三十過ぎにして固く心に誓った次第です。

IOCでの発表はプレナリー、ポスター、口頭、シンポジウム、ラウンドテーブルによって構成されています。睡眠時間がたっぷり必要な私は午前のプレナリーと夜のラウンドテーブルには残念ながら参加できませんでしたが、他はちゃんと聞けました。論文として発表されていて既に内容を

知っている研究もありましたが、実際に本人の説明を目の前で聞くことが出来る、というのは貴重な体験です。論理でガチガチに固められた隙のない論文とはまた違って、発表ではざっくりばらんな生の思考も垣間見られた気がしてよかったです。会場内は全体的に明るく、発表者までの距離も近いので、論文でお馴染みのあの人はこんな顔だったのか、意外と若いじゃん、などと素朴な楽しみもありました。

私は今回が初の国際学会参加となるのですが、今回大会は普段参加している日本鳥学会大会と比べて圧倒的にレベルが高かったように感じます。テーマそのものの面白さというか、目の付け所については言うまでもないのですが、野鳥を使った研究だということにサンプル数が7,000強だったり、シジュウカラを使って人為選択実験をしていたり、完全に統一された画一的な実験デザインなど、全てにおいて圧倒されました。思わず自分の研究(サンプル数30未満、野外でなんとなくとれたデータを後で解釈する、そもそも実験をしない)と比較してしまいました。自分の研究が国際誌に載らないのも合点がいきます。西欧の研究はチームを組んでシステムティックに行っているようですので、個々人がコツコツ地道に研究しているだけでは誌面を争っても勝てるはずがないのかもしれない。

今回、ひとの発表は特に音声についての研究発表に着目して聞いてみました。室内でX線を使って生きた鳥の発声過程をリアルタイムで調べている研究や、左右の発声器官の機能的な違いを調べている研究など、国内大会では聞いたこともない様々な研究を目の当たりにすることができ、なかなか面白かったです。発表自体もX線を使ったリアルタイムの研究はビデオの提示により鳥の発声過程と各部位の動きまでもが一目瞭然で魅力的でした。単純に自分が知らなかったことを理解できるのは嬉しいですし、普段あまり接点のない研究分野でも発表が魅力的だと引きつけられます。野外の研究では、ランバート効果を説明されていたHenrik Brummさんの発表はとてもわかりやすくシンプルで、それでいて体系だってまとめられており、門外漢でも研究の全体像が把握できる気持ちのよいものでした。それでいて発表中にさらっとでてくるご自身の引用文献が全て一流誌なもの流石です。もちろんそのような発表技術が優れたものばかりでなく、超がつくほどの一流の研究者が小声でゴニョゴニョとよくわからないスライドを

発表していたこともあるので、発表技法は人によりけりで、研究能力とは一概に一致しないようです。発表下手な自分としては少し、救われます。

自分自身のポスター発表は初日でした。内容は博士課程在学時に行なった研究のまとめでしたので、いただいたコメントが論文に反映されることはないのですが、別種でも同じようなパターンがみられていることや、率直な感想などを聞くことができ、有益でした。発表には知り合いの方だけでなく、国内でも初めての方や、韓国の方など、色々な方が聞きに来てくださいました。中でも、近いテーマと材料を扱っている研究者であるAnders Møllerさん(ツバメの研究者)やAlexandre Roulinさん(メンフクロウの研究者)と直接お目にかかり、会話できたのは今回の大会で最高に嬉しかったことの1つです。両者とも一流誌に多数の論文が掲載されているにも関わらず、肩肘張ったところがなく自然体で、それでいてちゃんと発表を聞いてくれたことが印象的でした。偉くなるほど研究の現場から離れていく(いかざるを得ない)日本とは違って、海外研究者はいつまでも現役で、アグレッシブに研究しているようです。Roulinさんについてはその後主催する色彩多型のシンポジウムを後ほど聞きに行ったのですが、シンポジウム中も変わらず気さくな印象を受けました。その発表自体も面白く、普通は遺伝子、行動、生態と各自自分の領域を決めて、固執するものかと思うのですが、遺伝子から生態まで、興味深いテーマを広く深く追えていて、こういう風に研究がしたいと思えるものでした。あるテーマに沿って研究を続けるとだんだんと細かい話になっていくことが多い気がしますが、本筋をしっかり押さえて研究されているような気がします。あとは単純に自分の趣味なのですが、行動の研究は直感的ですし、見ていて面白かったです。

国際学会を通じて意外だったのは、基本、人が居ないということです。個人的には、夜、酒を片手にポスターを見る、というのが国際学会では一般的だと聞いていたので、21日の夜に行なわれたspecial poster sessionsは開催前から楽しみにしていたのですが、発表者、聴衆ともあまり人がいなかった印象です。期待しすぎたのかもしれませんが、これはちょっとだけ残念でした。日中についても口頭発表、プレナリー、シンポジウムの間はポスター会場には誰もいなかったのが印象的でした。僕は長時間じっとしてられないたちなので、口頭の講演は適当なところで抜けだして休

憩がてら会場をウロウロするのですが、あまりそういう人は見受けられず、なんだか集中力の違いまでみせつけられた気がします。余談ですが、その集中力の足りない自分には会場内にて無料で振る舞われたコーヒーは大助かりで、会期中は睡魔に襲われることもありませんでした。私自身はありつけませんでした。パンやビールの提供もあったそうです。会場を隈なくうろついていた割には聞こうと思っていた発表は聞けず、ビールも見逃して、何をやっていたのだかという感じです。

IOCの会期期間は1週間といつもの日本鳥学会と比べると長めでしたが、あっという間でした。口頭発表のファイル受け取り係など、出しゃばっては数々のミスをして運営の皆様にはかえって御迷惑をお掛けしてしまいました（その節は誠にすみませんでした）が、それでも自分にとっては実りの多い大会でした。自分の発表を海外の研究者に直接聞いてもらえたというのもそうですが、単純に海外の研究者が実際にどういう人達で、どういう風に研究をして発表をするのか、垣間みれた気がします。次回大会は4年後にカナダのバンクーバーで開催されるようですので、来年か再来年にでももう少し英語力を鍛えて、今度は話についていけるようにしたいと思います。

最後に、IOCで大変お世話になった立教大学の大会運営の皆様、それからこの場を与えてくださった綿貫先生に感謝させていただきます。

（総合研究大学院大学先導科学研究科）

## 第26回 国際鳥類学会議に参加して

石井絢子

2014年8月18日から24日まで、東京の立教大学で開催されたInternational Ornithological Congress（国際鳥類学会議、以下IOC）に伊藤基金による派遣助成を受けたので、参加報告をさせていただきますと思う。

8月18日、私はポスタケースを背負って冷や汗をかいていた。初めての国際学会に対しての緊張のせいもあるが、前日から突然の歯の痛みのせいである。学会参加の楽しみの一つが食事である私にとって、歯の痛みは死活問題である。池袋駅近くの歯科医院に何件か電話をし、治療してくれる病院を探した。幸い、Opening Ceremonyの前に診療してくれる病院が見つかった。池袋駅から立教大学へ行き、受付を済ませ、ポスターを大急ぎで

貼って、池袋駅に戻った。池袋駅に戻る途中に出会った、ニューカレドニアで大変お世話になった、Theuerkauf博士に「歯が痛いので、病院に行ってきます」と伝えた。今思えば、その一言が初国際学会の初英会話だった。歯科医院での診察の結果、歯の痛みが知覚過敏によるものだと分かり一安心した。歯に薬を塗ってもらい、準備万端の私は、満を持してOpening CeremonyとWelcome Receptionに臨んだ。23年しか生きていないが、Welcome Receptionでビールを飲んだ時ほど、歯科医院に行って良かったという日は来ないだろうと思った。スタートダッシュは上々、いよいよ学会本番が始まるのである。

今回のIOCは、プレナリーが9講演、シンポジウムが45セッション、口頭発表が155講演、ポスターが498枚、自由集会在16セッションという規模の大きな大会だった。私は、今まで日本鳥学会と日本生態学会の2学会しか参加したことがなかったの、国際学会でもある今大会はとても印象的なものだった。

印象的なものの一つに、神経生理学的・認知科学的研究の研究に多く触れられたことである。別段バードウォッチャーでもなかった私は、学部3年生の時に、鳥のことを知ろうと何冊か本を読んでいた。そのときの本の中にたまたま載っていた歌の研究が、とても面白かったのを今でも覚えている。そのため、現在は給餌行動の研究をしているが、歌の研究には一種の憧れがあった。今大会では、日本鳥学会と比較するとかなり多くの歌の研究者が集まっていたように思う。気づけば、シンポジウムのほとんどは歌や認知科学のセッションにいた。今まで、観察主体の研究をしていた私にとって、歌や認知科学的研究の手法はユニークなものに感じられ、「いつか私も誰かをわくわくさせるような研究がしてみたい」と思わせてくれた。

印象的なもののもう一つは、自分のポスター発表だ。卒業研究を始めた頃の頃は、まさか自分自身が修士1年で英語発表をするなど考えもしなかったと思う。ガチガチに緊張し、何人かの知り合いの方にサクラ役をしてもらいながら、ポスター発表を行った。変なところで気弱な私は、どんなことを言われるのかビクビクしていたが、「面白いね」と何人かが興味を示してくれたことがとても嬉しかった。ポスターを聞きに来てくれた人の中に、韓国でシジュウカラとヤマガラの研究をしている大学院生がいて、共にディスカッションできたのも貴重な経験となった。

今大会で、悪い意味で印象に残ったものもある。それは自分自身の英語力だ。様々な講演においては、事前に研究内容の一部を知っているものは理解できたが、馴染みのない分野ではほとんど理解が追いつかなかった。自身のポスター発表においても、相手の質問は理解できても、適切な言い回しが思いつかず、歯がゆい思いを質問者にさせてしまった。「日本語なら答えられるのに」と思ってしまうのが、本当に悔しかった。次回のIOCにも参加するならば、私はまだ学生の身分である。英語力は一朝一夕には成長しないので、この悔しさをバネに日々鍛錬しようと思った。

最後に、伊藤基金のIOC助成をうけられたこと、そしてそれにより、このような素晴らしい経験ができたことを感謝したい。

(九州大学大学院 システム生命科学府)

## 第26回 国際鳥類学会議参加報告

西田有佑

私は、国際鳥類学会議 (International Ornithological Congress 略して IOC) に参加いたしました。IOCは、教科書を執筆するような著名な研究者から、私のような学生まで世界中の鳥類研究者が集う、4年に一度の国際学会です。参加の動機は、自分の研究に対する世界の反応を直に感じてみたいというものです。私は、自身の研究を海外に発表したことがありませんでした。学術研究は世界にオープンされているのを基本ポリシーとしていますが、英語で発表されていなければ事実上クローズドです。せっかくの研究成果も日本語のままでは認知されていないのも同然なのです。

第26回の開催国は日本で、場所は立教大学、会期は8月18日から24日までの7日間、60か国以上から1,177人の研究者らが参加しました。発表形式はポスター・オーラル・シンポジウム・プレナリー・ラウンドテーブルの5つで、国内の学会でもよくみられる形式ですが、ラウンドテーブルの雰囲気は日本の学会のそれとは違っていました。私の参加したラウンドテーブルは渡りの際のフライトコールに関するもので、目次のスライドには興味をそそられるテーマが多く書かれていて、これは勉強になると思っていたのも束の間、外国人の司会者の方が「スライドは用意しているのだけど、別にやらなくていいよね？」とスライドをまるごとぶっ飛ばして、いきなりフリーの議論を始

めたのです。私は驚きましたが、参加されていた他の方々はいきなりの議論にもウェルカムのようでした。議論の内容ですが、ほとんど聞き取れません。スライドの文字を見ながらであれば、なんとか話す内容も理解できるものなのですが…。早速、国際学会 (というよりイングリッシュ) の洗礼を受けたのでした。

私の発表はポスターで、さえずりのレパトリー数 (ヒトで例えるなら語彙数のようなもの) の定量的な算出方法の開発という内容です。レパトリー数の伝統的な定量方法は観察者の主観に依るところが大きく、問題視されてはいたものの長い間放置されていました。私は、その問題への解決方法を開発しました。音声解析の方法論の研究ですから、ぐっと観客は少ないかもしれないと覚悟はしていましたが、思いのほか多い8人の方に見に来ていただきました。おそらく、音声研究に携わっている方がそのほとんどだったと思います。英語での質問には3回ほど聞き直すことになりましたが、たどたどしい英語と、ジェスチャーと、メモに絵を描くことでなんとか質問に答えることができました。

IOCでの印象に残っている発表について記したいと思います。音声関係の発表はほとんど聞かせていただきましたが、特に印象に残っているのはH. Brumm博士のシンポジウムと、K. B. Sewall博士の口頭発表です。Brumm博士は、鳴禽類が環境騒音の大きさに合わせて、自身のさえずりの音量を調整するランバード効果に関する研究を多数発表されていて、それら過去の研究の総括を発表なさっていました。会場はほぼ満員で、注目の高さを窺わせられます。交通量の多いラッシュタイム時の大きな騒音に合わせて、郊外に生息する鳥たちも大きな声量でさえずるという結果は会場を沸かせていました。それだけ生物にとって、音声コミュニケーションは重要だということです。開発事業などではよく生物の生息地の減少が問題視されますが、それ以外にも建設機械などの騒音も生物への影響が大きく、無視できない要素なのだろうと考えさせられました。Sewall博士は、さえずりのレパトリー数が大きくなるほど、空間認知能力が低くなるという発表をなさっていました。これは直観的には意外でした。なぜなら、レパトリー数が多い個体ほど、さまざまな他の形質 (例えば年齢や採餌能力など) が高くなる、つまり正の相関がみられるというのがよくある結果で、当然認知能力も高くなるものだと予想していたか

らです。Sewall 博士はこの結果に対して、「レパトリー数を司る HVC 脳領域の大きさと、認知能力を司る海馬との間に、脳の容量のトレードオフが存在する」という仮説を提唱されていました。

初めての国際学会は、自国開催ということで周りに日本人が多かったため心細いということはなく、のびのびと楽しむことができました。IOC は音声関係の発表が大変充実していて、研究への想像力が刺激される有意義な 7 日間でした。新しく思いついたアイデアを早速、研究にフィードバックさせたいと思います。反省点は、やはり英語のリスニングです。4 年後の 2018 年バンクーバー大会では、何度も聞き直さなくてもいいぐらいにはリスニング力をつけると宣誓して、4 年後の自分に戒めておきたいと思います。

最後になりましたが、今回の国際鳥類学会議は、伊藤基金による IOC 派遣補助を受けて参加させていただきました。大会参加費を援助していただいたおかげで、研究発表に邁進することができました。この場を借りて御礼申し上げます。誠に有難うございました。

(大阪市立大学大学院 理学研究科)

### 第 26 回国際鳥類学会議 (IOC26) ・ 日本鳥学会 2014 年度大会運営を終えて

田中啓太

去る 2014 年 8 月 18 日より 24 日まで、そして、8 月 22 日より 25 日まで、立教大学において第 26 回国際鳥類学会議 (IOC26) と、それに併行する形で日本鳥学会 2014 年度大会が開催されました。IOC と鳥学会大会の合同実行委員長として運営に携わらせていただきましたので、ここで報告させていただきます。

事の発端は 2013 年秋、ニューカレドニアでの野外調査中の、佐藤 望くんととの雑談でした。

「誰かがやらなければとんでもないことになる…」。

ならばこちらから買って出ようということで (キャリア上の利点も考えて)、炎天下の赤土の道を歩きながら上田先生に二人で申し出ました。

「IOC、僕らでやります。ただし、重要なポジションをください。」

こうして、その場で実行委員長と事務局長が決まりました。正式には 2014 年 3 月、大会会長の上田恵介先生、ISS の丸山瑞紀さん、上村花子さん、上

田研の佐藤 望くん (事務局長)、上沖正欣くん (広報委員長)、岡久雄二くん、米倉立子さん、そして私というメンバーで合同実行委員会が発足しました。

発足当時は、既に予算に織り込み済みだった数百万円の助成金が諸般の事情からご破産になり、そのうえ数十万の赤字見込み (最終決算で赤字の場合は某先生の退職金から補填というブラックな条件付き) という、鼻血が出そうな状況でしたが、財布の紐とふんどしを締め直し、このどこまでそびえているかわからない切り立った崖を登り切ると発奮し、絶望感を払拭したのを覚えています。最終的には個々のメンバーのみなみならぬ営業・節約努力により、黒字で終えることができましたので、ご安心ください。

### 大学施設

立教大学は一部の校舎が文化財に指定されており、新しく建設された校舎も古いものと調和するよう、凝った造りをしています。統一感のある美しい佇まいですが、その裏には関連部署の職員の方々の施設の維持管理へのプライドという隠れた努力があります。そのため、使用には細心の注意が必要でした。当然のことながら、施設の利用は複雑な規則 (不文律含む) で雁字搦めとなっており、最も苦心したのは施設の利用計画と許可申請といえます。幸か不幸か、開会の 10 日前から大学が夏季休業に入り、全ての部署が対応不可能になっていたため、それまでは使用許可申請に終始していたと言っても過言ではありません。

一方、昨今の大学の設備としては珍しくはないのかも知れませんが、幸いにも全ての教室・会議室に AV 機器が完備されていたので、プロジェクタの確保に奔走しないで済んだのは非常に助かりました。さらに、学内の関連部署であるメディアセンターの職員の方々が強い責任感を持って対応してくださり、そのお陰で盆石パフォーマンス (残念ながら私は業務中で観られませんでした) や Japan Evening、次回のバンクーバー大会の宣伝なども含め、スムーズにそしてスマートに進行できたのではないかと思います。

とはいえ、とくに都心でハコモロをおさえるのは容易ではないということを実感させられました。例えばコンベンションセンターやホテルなど、外注した場合のコストを考えると (おそらく 1 千万円は下らなかつたと思います)、あのような施設を無料で使用できたのは何を差し引いても幸運だっ

たと思います。

### 第一学生食堂

立教大学には生協がなく、食堂は一般企業が経営しています。第一学生食堂の社長さんとは個人的な付き合いがあり、だいぶ我儘を聞いてもらいました。そもそも夏季休業中で営業は予定されていなかったところを無理にお願いして開店してもらったのですが、そのうえやれスポンサーからの飲料の提供だ、ベジタリアン・ハラール対応で昆布出汁にしろだ、コーヒーを入れるための湯をよこせだと、やたら注文が多く、さらに全参加者は食堂のキャパシティを大きく超えているにもかかわらず一日あたり何人利用するか予測できないという状況で営業に踏み切るといのは大きな賭けだったと思います。食堂経営も慈善事業ではないので、当然のことながら我々もノルマを課されていましたが、参加者の方々が学食で食事をしていただいたお陰でそのノルマを達成することができました（少なくとも学食からはそう伺っております）。

### 「上」対応

実行委員会は、IOCを運営する様々な委員会の末端の最下層に位置する委員会だったわけですが、時折上層の委員会から降ってくる無理難題に対処する必要がありました。特に大きな裁量権を持っているのはIOU（国際鳥類学連合）直轄の委員会でしたが、大なり小なりワーカホリックの日本人にとっては想定外の休暇のとり方（開会の一週間前までの10日間）や、開会を二日後に控えた状況での座長の選定方法の変更（もちろん突っぱねました）、重要なアナウンスをメール配信しながらない（それが結局混乱の元に…）などなど、ほどほどに振り回されました。ただ、異文化のギャップ（知ってはいたものの）など、人生でもう一度国際学会を開催することがあれば活用できるであろう重要な教訓をいくつか得られました。そのうちみなさんにも是非知っていただきたいのは、以下のものです。

「セッションに番号を振るなら必ず時系列で！」

### ボランティアの方々

今回の学会運営について語る上で、決して忘れてはならないのがボランティアの方々の存在です。もちろん、IOCの開催にこぎつけるまでには様々な方が様々な形で甚大な努力をしてきたわけですが、

ボランティアの方々のご協力は学会の成功というジグソーパズルを完成させるための最後のピースでした。1,000人を超える参加者への対応を実行委員会の8人だけで行うことは確実に不可能で、ボランティアの方々のご協力がなければIOCは大失敗に終わっていたでしょう。確かにお願いするタイミングや方法などは理想的とはいえませんが、それにもかかわらず快くお引き受けいただき、そして献身的にお手伝いをしてくれました。この場を借りて感謝したいと思います。

ボランティアの方々は大まかに3つグループからなっていました。まずは上田先生が副学長を勤めている立教セカンドステージ大学といい、定年後のシニア層向けの教育を行っているカリキュラムに在籍しておられる現役学生・OB・OGの方々です。お引き受けくださったのは英会話クラブのみなさんで、企業で働いていたころは海外赴任なども経験し、ほとんどの方が英会話に堪能だったため、主に受付や食堂での海外参加者への対応をお願いしました。次は岡久くんや佐藤くんなどの人脈を頼りに募集した、鳥の研究に興味がある若者たちで、会場における様々な業務をお願いしました。最後は私が開会間際に鳥学会のメーリングリストなどを通じてお願いしたIOC参加者のみなさんで、主に講演会場の座長やファイルの受け渡し、マイク係をお願いしました。合計で100人近い方々にお手伝いいただきました。どうもありがとうございました。

### 鳥学会会員として…

一点、この場を借りて、苦言を呈させていただきます。非常に残念だったのは、一部の、学会内での立場を考えると当然参加してしかるべき方々が、IOCには参加していても、鳥学会大会には参加していなかったことです。事情はそれぞれおありでしょうが、そもそも、年次大会をIOCと併せて開催するのは総会ではなく委員会で決定したことですし、また、年次大会に参加しなければ学会の意思決定機関である総会には参加できません（少なくとも委任状は事前にこちらに送付すべきです）。それなりの規模の学会を運営するという立場にあって、これは正しい判断といえるのでしょうか。後続を生むためには指導的な立場にある人間が自らの態度で手本を示す必要があるのではないのでしょうか。個人的には、然るべき立場の方のうち事前登録をした方が「少数派」だったという事実気づいたときは、正直なところかなり意気消



沈しました。確かに、これまでは新入会員というのは何をしなくても自動的に入ってくるものだったのかも知れません。しかし、この少子高齢化した日本ではそのような常識はもはや過去のものといえます。今後は若い優秀な人材の確保というパイの奪い合いは激化していくでしょう。新たな人材を確保し、そして優秀な人材の流出を防ぐためには、何をすべきで何をすべきでないか、とくに運営に携わる立場にいる会員はそれをしっかり心に刻むべきだと思います。

#### 最後に

学会というものは会員の能動的かつ自発的な活

動の上に成り立っているということを実感しました。ただし、鳥学会は会員同士の「友情」への依存が少し過度になっている気がします。もう少しシステムチックに運営の負担を分散できれば（若手登用も含め）、より頑健な運営が可能になるのではないかと思います。

由緒正しい国際学会を開催し成功させたことで、日本鳥学会は良い波に乗っていると私は信じています。これを、間口を広げて新会員をリクルートする、そして学術的なプロフェッショナリズムを高めるという二つの方向において、更なる発展の足がかりにすることができればと思います。

(立教大学理学部)